

平成30年 環境生活委員会 開催状況 (環境生活部)

開催年月日 平成30年3月19日
 質問者 民進党・道民連合 広田まゆみ 委員
 答弁者 環境生活部長 小玉 俊宏
 文化・スポーツ局長 甲谷 恵
 文化振興課長 高見 芳彦

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>一 北海道百年記念塔の再生に向けた取組について 私の方から、北海道百年記念塔の再生に向けた取組について、ご質問させていただきたいと思います。 以前の常任委員会でも、百年記念施設全般にわたって、質疑をさせていただきました。 また、今回の予算特別委員会においても、若干の議論があったと承知をしています。 私としては、前回の質疑では、百年記念施設のあり方の検討にあたって、特に、次世代、子ども達を中心に、道民の皆さんに向けて開かれた議論によって決定すべきであるというプロセスを重視する立場で発言をさせていただいたわけですが、この間の様々な道議会議論ですとか、色々な調査を私がさせていただいた中で、私の認識としては、この開かれた議論がまず前提として、当初の計画と異なって、錆片の崩落などが起きたわけですから、その原因、管理のあり方ですとか、そもそもの設計とか施工の問題についても、しっかり総括をした後で、今後の公共建築設計のあり方の参考とするためにも、緻細な情報共有が、その開かれた議論の前提としてあるべきだと考えます。 また、私としては、残念ながら、文化を所管する担当レベルにおいてさえ、札幌、北海道のこれまで150年の間繰り返されてきた、歴史的建造物の保全のあり方についての問題意識が浸透しきれていないと感じさせていただきました。また、一般的に、どうしても、道議会議論の中でも、短期的なコスト論に傾きがちである議論の趨勢を認識し、プロセスにただ委ねるのではなく、何らかの形で存続をさせるべきだとの立場に立って、今回、改めて質疑をさせていただくことにいたしました。</p> <p>(一) 百年記念施設設立の目的についての認識と150年を契機とした再生検討の目的 百年記念施設設立の今、150年を契機とした再生を検討されているわけですが、その前に、まず、百年記念施設設立の経過や目的について今一度、確認をしたいと思いますが、百年記念事業は、1968年9月2日に記念式典などを中心として、種々の記念事業が企画されたと承知をしています。記念式典や博覧会、スポーツ大会、開拓功労者の顕彰像や記念碑の建立、また、道史の編集などが行われたと承知しています。 そのなかで、いわゆるハード物としては、全道的に市町村立郷土資料館の建設助成や、青少年施設を中心とした地方記念施設の建設助成など、さまざまなことがありましたが、その最大規模の事業が、道立自然公園野幌森林公園、そして、開拓記念館の建設、そして、今回、質問のテーマとさせていただいております百年記念塔であったと承知をしています。 改めて伺いますが、150年を契機として、このそれぞれの百年記念施設のあり方検討に入られていますが、そもそも、百年記念事業の目的をどのように理解、認識して、今回の再生に向けた検討にあたって、次の世代にどんな成果を残される考えか伺います。</p> <p>(二) 百年記念塔のデザインの意図と施工管理の状況について 理想として、このエリアの再生、全体として考えていくという考えが示されているわけですが、百年記念塔にまた、少しフォーカスしてご質問したいのですが、この百年記念塔のデザインそもそもの意図と、施工管理の状況などについて伺っていきたいと思います。</p>	<p>(文化振興課長) 百年記念事業の目的などについてであります。昭和43年の北海道百年を記念した事業は、当時の道民が先人の労苦に深く感謝し、未来に向けて力強く前進する決意をもって、記念式典をはじめ、野幌森林公園の造成など様々な取組を行ったものと承知しております。 今回、北海道命名150年の節目を迎えるにあたり、次の50年、100年を見据え、道民の思いのこもった百年記念事業で設置された博物館、開拓の村、記念塔などを今後、どのような形で、次の世代に引き継いでいくのがふさわしいのかという観点から、道民の皆様のご意見を伺いながら検討を行い、構想として取りまとめ、その結果をこのエリアの再生につないでいく考えてございます。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>百年記念塔は、1967年12月、公開設計協議により、道内在住の井口健さんの作品が選定され、実施設計は、久米設計事務所、建設は、北海道百年記念塔建設期成会が行いましたが、実際の請負は伊藤組土建さんが中心になって行い、着工が1968年、施工が1970年であったと伺っております。</p> <p>当時の文献などから拾いますと、設計者の井口健氏は、「設計にあたり、デザイン上意図したことは、北海道の開拓に尽くされた先人の労苦に感謝の意を表明し、さらに未来の輝かしい郷土を建設しようとする道民の決意をいかに造形的に表現するか」そこに専心をされ、さらに、その、「北海道の厳しい自然に打ち克った逞しい生命力、とくに冬期の雪景色に代表される中で、その雪の中に立つ塔のイメージを強く求めて、主たる素材として、耐候性高張力鋼板を裸使用とした。」とされております。</p> <p>この耐候性高張力鋼板というのは、別名コールテン鋼と呼ばれておりまして、一般的には、塗装せずにそのまま使用してもあまり錆びず、またその錆が比較的緻密で内部まで腐食されないとされ、錆の色もまた年を重ねるごとに美しさがあるとされていたと聞いております。</p> <p>このコールテン鋼は、適切な管理をすれば、無塗装で使用できるので、メンテナンスの費用や塗装費を低減できるとされています。</p> <p>ところが、塔上層部からの錆片の落下を契機に、平成26年7月からは、一般利用者の立ち入りを禁止する事態となっております。私も、先日現場に行かせていただき、外見上は確認をさせていただきましたが、今さらながらではありますけれども、まず、錆片落下の具体的な状況などについて伺っていきたくと思います。</p> <p>1 錆片落下の具体的な状況について</p> <p>まず、錆片落下についてですが、最初の発見の状況や、実際の落下の回数や大きさなどはどのような状況だったのでしょうか伺います。</p> <p>【再】錆片落下の具体的な状況について</p> <p>平成26年7月に、開拓記念館職員の方が発見されたということですがけれども26年7月に、塔への立入禁止の措置が講じられているわけですがございますけれども、それまで全く変化がなく、突然、変化が認められたとは考えにくいと思うのですけれども、その以前の維持管理の責任はどこにどのようにあったのか伺いたくと思います。</p> <p>もちろんその、コールテン鋼という素材の科学的にどうするか、どう見るか、どう判断するかというのは、私自身、外見上見ただけでは分からなかったわけですがけれども、例えばですね、安全性の問題にしても、例えば、風による飛来などが想定されるのであれば、周囲は、確かに立入禁止になってはいますけれども、安全性は担保できていないのではないかと考えます。具体的にどのような危険性に対して、どのように安全を担保しているといえるのでしょうか。もし、本当に安全性の問題があったら、本来であれば、ただちに道の責任において解体など、何らかの措置がされるべきではないか、所見を伺います。</p> <p>2 錆片落下の原因について</p> <p>錆片落下の原因について伺いたくはございますけれども、先ほどもいいましたとおり、このコールテン鋼という素材は、</p>	<p>(文化振興課長)</p> <p>記念塔の状況についてであります。平成26年7月に、当時の開拓記念館職員が塔内部の定期点検の際に、ボルトの緩みや各階の梁等の上部に相当量の錆片の堆積を発見したところでございます。</p> <p>次いで、これらの修復、除去作業において、大きいもので約10cm程度の錆片の落下や、開口部下部の鉄製の見切板に、錆による穴あきや浮きが確認されたため、公園利用者の安全を第一に、塔への立入禁止の措置を講じております。</p> <p>その後専門業者の立会の下に行った調査においても、複数カ所、見切板の腐食が進み、落下の懸念もあることが確認されたところでございます。</p> <p>(文化振興課長)</p> <p>錆片落下などの具体的な状況についてであります。老朽化が進展していることから、平成26年度より点検等は週1回に増やすなどの対策強化を行ったところございまして、7月の塔内部の点検の際に、ボルトの緩みなどを確認したことから、更に詳細な点検を実施したところです。</p> <p>百年記念塔を管理する道としては、立入禁止の措置を講じるとともに、専門業者による応急の補修工事を実施したところでありますが、利用者の安全確保を第一に考え、立入禁止は継続しているところであります。</p> <p>(文化振興課長)</p> <p>錆片落下などの原因についてであります。記念塔に使用している素材は、本道特有の積雪寒冷という厳しい</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>ちょっと特徴がある素材ですけれども、現在でも、山間部の橋梁その他で広く用いられていますけれども、一定の条件下では、水分や塩分等に弱点もあるとも伺いました。</p> <p>この錆片が落下という事態を招いた原因について、コールテン鋼という素材の当時の知見と違う事象で、コールテン鋼という素材自体が問題なのか、あるいは、コールテン鋼という素材の特徴を十分に施工段階で活かされなかった構造上の問題があったのか、または、適切な保守が行われていなかった、それをこう放置してきたことが原因なのか、錆片落下の原因をしっかりと調査把握し、今後の議論に向けて情報共有することが重要だと考えますが、落下の原因をどのように把握しているのか伺います。</p> <p>【再①】錆片落下の具体的な原因について</p> <p>錆片落下の原因について、様々な要因が複合して劣化が進んだとのことですが、維持管理については平成26年度以前も、手をかけてきたと、9億円ぐらいのお金をかけてきたというご答弁がありましたけれども、まず、最初に、様々な要因が複合して劣化が進んでいるとの答弁でしたけれども、様々な要因というのは、具体的にどのようなものなのか、繰り返しますけれども、コールテン鋼という素材そのものの選択が間違っていたということなのか、あるいはその素材を使ったが設計の意図に沿った十分な施工がされていなかったのかどうか、所見を伺いたいと思います。</p> <p>今、そのコールテン鋼という素材に関してのご説明があったところでございますけれども、そもそもそのコールテン鋼という素材そのものが原因なのか、あるいは全体の構造が、何というのでしょうか、錆片の落下とかの原因なのか、というところをご答弁には無かったと思います。</p> <p>【再②】維持管理について</p> <p>次に維持管理について伺いますが、毎年数百万円をかけ、特に平成4年、11年に大規模修繕を行って、その後、平成26年まで、まあ、大規模修繕はなかなか財政的な状況なのか、抑制的になっていたのか行われていないのですけれども、もし適切な維持管理が行われていれば、あるいは修繕が適度になされていれば、平成26年に立入禁止にしなければいけなかったような、錆片落下など、そういう事態は起きなかったのではないかと見解を伺います。</p> <p>道民の皆さんの財産だと思うのですこの百年記念塔は。先ほどの設計のことに関しても、この劣化に至った責任の所在が、とても曖昧だと思うのです。別に犯人捜しをしているわけではないのですけれども、これからこの記念塔を含めた地域の再生、エリアの再生を考えていくときに、例えば、その設計者のデザインの意図が、あるいは、その短期的な、その、作っていくときに、ある程度予算を縮減しなければいけないことによって何らかの十分さがなくことによって、本来の設計の意図が保たれなかったのか、あるいは、どうしても、財政的な予算の制約の中で、適切な維持補修がされなかったことによって、結局、道民財産の損失を招くことに、結果としてなっているのか。そういうことをきちっと総括をすることが、</p>	<p>条件に加えまして、日本海からの塩分を含んだ風雪の影響を直接受けることなど、様々な要因が複合して劣化が進んだものと推察しております。</p> <p>また、維持管理については、毎年、数百万円程度をかけ実施してきたほか、平成4年に2億3百万円、11年に3億5千万円、合計で5億5千万円の大規模修繕も行い、これまでに建設費を除く維持管理費といたしまして約9億円をかけてきたところでございます。</p> <p>（文化振興課長）</p> <p>具体的な原因についてであります。百年記念塔は、昭和45年の完成以降、本道特有の積雪寒冷という厳しい環境におかれておまして、冬場は、日本海からの風雪を直接受けるほか、夏場は、熱膨張による影響が見られるところでございます。</p> <p>外板などの素材は、優れた耐候性を発揮させるため、合金元素を添加しており、塗装せず、素地のまま使用しても、保護性の錆が本体への錆の浸食を抑えるため、最小のメンテナンスで長期的な使用が可能とされております。</p> <p>その一方で、海から飛来する塩分の影響が大きい地区では、必ずしも期待通りの効果が得られないケースも発生してきたことから、1990年代にかけて、国の研究所等による調査研究が行われまして、現在では、JISなどの規格で適用可能な地域等の基準が定められているところでございます。</p> <p>（文化振興課長）</p> <p>維持管理についてであります。百年記念塔については、これまで、毎年度の修繕のほか、設備の耐用年数や劣化具合に応じ、大規模修繕を行ってきたところでございます。</p> <p>平成4年には、設備等の劣化により、エレベーターや階段など、約2億3百万円の内部の改修工事を行い、平成11年には、外部の劣化が進んだことから、パネル接合部に係る錆片の除去のほか、溶接補強や取付けボルトの更新処理など、3億5千万円の外部の改修工事を行っております。</p> <p>これ以降も、修繕等を行ってきたものの、設置後相当年数が経過したことに加え、本道特有の積雪寒冷という厳しい条件や、日本海からの塩分を含んだ風雪の影響など、様々な要因の影響により劣化が進んだものと推察しております。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>150年の未来に向かって、大事だなと思っているわけです。</p> <p>(三) 今後の進むべき方向について 1 モニュメントとしての価値の認識について 次には、今後の進むべき方向について、少し議論をさせていただきたいと思うのですけれども、結果として、今、予算特別委員会の議論でも、また、この常任委員会でも、議論はされましたけれども、コストについての議論がされております。予算特別委員会でも改めて答弁でございましたけれども、展望台としての存続が、27億円程度だったと思いますが、そして、モニュメントとして存続する場合も、だいたい、3億円ほど減じるということで、結果として、20億円以上のコストがかかるかとされています。解体すれば4億円というふうになっております。</p> <p>個人的には、展望塔としての重要性については、高くないと考えておりますが、設立当時の「先人の偉業を後世に顕彰する。」という崇高な趣旨を踏まえれば、ある時代の記憶を共有し、次の世代に受け継いでゆく象徴としての意味を持つモニュメントであると私自身は考えます。そのモニュメントが、今の人間の平均寿命より短い50年という期間で、先ほど申し上げましたように、十分な原因の検証や総括もなく、ただ解体するというだけでは許しがたい、恥ずべきことではないかと考えるわけです。</p> <p>そもそも、設計者の意図や、コールテン鋼という素材を選んだこと自体が、本来保守費用をおさえて、未来永劫に残るモニュメントとなることを想定していたと考えますが、百年記念塔のもつ「価値」について、どのように考えているのか、道としての所見を伺います。</p> <p>【再①】有識者による懇談会について 今のご答弁では、有識者による懇談会において、百年記念塔に関しては、モニュメントとしての価値を認める意見もあった一方で、安全性や将来負担、周辺施設との関連など、様々な観点から引き続き、検討が必要とされたということに、ご答弁がありました。</p> <p>先ほど安全性についても、少し議論をさせていただいたのですけれども、例えば、安全性について、この、勿論有識者の皆さん、大変、ご苦勞をいただいでいて、感謝申し上げますけれども、この、例えば安全性について、この有識者による懇談会で、どのような専門性ですか、科学的データに基づいて、検証、判断をされたのでしょうか。</p> <p>また、周辺施設との関連など、様々な観点から引き続き、検討がされたことのお話ですけれども、どのような意見が出されたのか、改めて伺ってみたいと思います。</p> <p>有識者の中でも、躯体が朽ちていることを実感し、維持していくには相当危険ではないかといった意見があったということで、私自身も反省しますけれども、外見をただだけでは、先ほどいろいろ、あえて、ここで課長と議論をさせていただいたように、果たして、そういうその安全性の問題というのは、どの程度のものなのかということは、コールテン鋼という素材ですから、設計とか、今までは施工管理について、今まで頼んでいた業者ではない第三者の意見とかも、道民財産の維持管理のこれからということについて、重要ではないかなと思うわけですので、まず、それを指摘させていただきたいと思います。</p> <p>また、百年記念塔と周辺施設との関連で、皆さんの案にも書かれているように、まあ、これ後でも少し触れますけれども、佐藤忠良氏のレリーフを活用するということが大事かもしれませんけれども、道内の様々な彫刻家の方もいらっしゃるし、この百年記念塔全体の、ま</p>	<p>(文化振興課長) 百年記念塔についてであります、この記念塔は、先人の偉業を長く後世に顕彰するとともに、輝く未来を想像する決意の象徴として、建設されたものでございまして、地域のランドマークとして、また、周辺の広場とともに憩いの場として、広く道民に親しまれてきたところでございます。</p> <p>これまでの有識者による懇談会におきましても、百年記念塔に関しては、モニュメントとしての価値を認める意見もあった一方で、安全性や将来負担、周辺施設との関連など、様々な観点から、引き続き検討が必要とされたところでございます。</p> <p>道としては、記念塔建設に込められた道民の思いはしっかりと継承していくべきと考えておまして、道民の幅広いご意見を伺いながら、百年記念塔の今後のあり方について、十分検討してまいります。</p> <p>(文化振興課長) 有識者による懇談会についてであります、平成28年9月に有識者による懇談会を設置して以降、昨年10月まで、現地視察を含め5回開催いたしまして、百年記念施設に関して、現状や課題、今後の方向性について、様々なご意見をいただいたところでございます。</p> <p>その中で、記念塔の現状を視察いただいた上で、メンバーからは、モニュメントであり、シンボルタワーではあるが、躯体が朽ちていることを実感し、維持していくことは相当危険ではないか、といった意見があり、安全性や将来負担など様々な観点から引き続き検討すべきとされたところでございます。</p> <p>また、百年記念塔と周辺施設との関連では、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園全体をどう見るか、ゾーンとしての視点に立つことが大事、 ・佐藤忠良氏のレリーフを何らかの形で活用することが必要、 ・近隣の利用者が少ないと、公園の賑わいがないので、塔周辺の広場の利用について規制を見直す必要がある、などの意見があったところでございます。

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>あ、そうはいわないとおっしゃるかもしれませんがけれども、一つの、代替の一つとして、こういうレリーフということが、もし、テーマに上がっているとすると、逆に、それは、アーティストの皆さんに対して、大変失礼なことになるのではないかといたところも、あとでも重ねて触れるかもしれませんがけれども、ここで指摘をさせていただきたいと思います。</p> <p>【再②】 将来負担について 次に、将来負担について、50年間での見込み額を、展望台にしても、モニュメントとして残す場合にしても、50年間の見込み額を約30億円程度と出してまして、解体した場合は4億円ですよという出し方をされてますが、これ、単年度決算が全て良いわけではないということは分かっていますけれども、1年間で割り返せば、計算が間違っていないければ、約6千万円程度になると思うのですが、50年単位での将来負担額を議論の中で出してきた意図を伺います。</p> <p>【再③】 新たな知見について モニュメントとしての価値の認識について、伺っていききたいと思います。モニュメントとして維持する場合のコールテン鋼という今ある素材の評価が全く駄目なのであれば、そこ変わってきますよね。展望台だとか、維持補修にしても、そこについて、今の有識者懇談会の皆さんには大変感謝しますけれども、新たな知見が必要でないのではないかなと思います。もっと詳しい事業者に任せたり、そして、その朽ちながら存在をしていくモニュメントって、従来の建築設計業者さんだけでは分からないと思うので、海外での色々な事例も含めて、詳しい有識者や新たな知見が必要だと思っておりますが見解を伺います。</p> <p>2 道民財産という観点から 道民財産という観点から、改めて伺いたいと思っておりますが、この点についても、予算特別委員会においても繰り返された議論ではありますが、いうまでもありませんが、百年記念塔は、道庁のものでもなく道民の財産であります。 改めて、過去の北海道の歴史を振り返ると、実は、開道50周年記念には北海道博覧会が開催され「開道50周年を永久に記念すべき」ものとし、「拓殖館」という建物が建設されたのですが、これも60年で跡形もなく取り壊されました。 資料が残っていないくて、あまり検証、実際に文書とかではできないのですが、当時の状況からすれば、当時、官主導の博覧会だったとすれば、その関心は低いものだったかもしれません。 しかし、百年記念塔については、建設資金の半分は、少なくとも、民間からの拠出でありまして、5億円の半分の2億5千万円は、当時としては、決して少ない金額ではないだろうと思っております。 道民財産という観点からも、また、道内の建築設計に関連する業界における文化的志向というんですかね、それをしっかり高めて、北海道のこれから、150年先の未来のまちづくりや歴史的建造物の保全活用についての貢献をこれまで以上に、こう、建築設計の業界のほうにも促すためにも、なぜこうした事態に至ったかの原因究明と総括、その情報共有が明確にされるというのが真摯な道民議論の場の設定の前提になると私は考えますが、道としてどのように取り組む考えか伺います。</p> <p>3 北海道の文化的資産のこれからのあり方を象徴する百年記念塔及び百年記念施設の議論の位置づけについて 未来指向にたったとのご答弁がありましたけれども、いま、モニュメントとしての価値ということと、道民財産であるという観点から、さらには、繰り返しになり、重複しますけれども、北海道の文化的資産の、これから</p>	<p>(文化振興課長) 将来負担についてであります。百年記念塔を含む百年記念施設は、北海道百年記念事業の一環として整備された施設でありまして、これまで約50年間にわたって、道民に深く親しまれてきたものでございます。 道としては、自然、歴史、文化を体感できる貴重なこの空間を、今後の50年、100年先も展望しながら、次の世代にどのように引き継いでいくべきかを検討するため、これまでの維持管理費用のみならず、将来を見据え、今後50年間における記念塔に係る費用も算出したところでございます。</p> <p>(文化振興課長) 新たな知見についてであります。百年記念塔の今後のあり方に関しましては、専門家などからの意見聴取も重要と考えているところでございまして、これまでに、設計者の方に当時の状況や設計に当たったの考え方などをお聞きしたほか、百年記念塔に使用されている素材の製造メーカーからも、素材の耐久性に関する説明を受けてきたところでございます。 今後も検討にあたっての参考とするため、建築や公園デザインなどの専門家などから、関連する情報を収集してまいりたいと考えております。</p> <p>(文化・スポーツ局長) 再生構想の取りまとめ方についてでございますが、百年記念塔は、百年記念事業の一環として建設されたものでございまして、全体の建設費約5億円のうち、約半分の2億5千万円を市町村、企業、団体、道民の皆様からの寄附で賄ったところでございます。 このような背景も十分考慮し、今後、百年記念施設を含むこのエリアの再生構想を取りまとめるにあたりましては、記念塔などが置かれている現状を共有した上で、道民の皆様から意見を幅広く伺うことが非常に重要であると認識しておりまして、未来指向に立ったワークショップなどを開催してまいりますと考えてございます。</p> <p>(環境生活部長) 今後の取組についてでございますが、昨年11月にとりまとめた「考え方」では、百年記念塔に関しまして、今後、幅広く道民の意見を伺いながら、安全性や将来世代の負担軽減など様々な観点から引き続き検討を進める</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>のあり方を象徴する議論だと、私自身は位置付けています。その観点から最後に伺いたいと思います。</p> <p>百年記念塔は、モニュメントとして、また、ある意味で、巨大屋外彫刻として見たときに、観覧に入場料が必要な博物館や美術館など異なる地域資源としての価値があります。</p> <p>この百年記念塔に関する議論を、これまで、北海道、札幌では、特に新しい物に価値を求めて、文化財に至らないまでも、歴史的な価値ある建造物を、コスト論や短期的な収益を求めて、効率などを求めて、次々と簡単に壊してきた札幌、北海道の今までを立ち止まって検証する議論のきっかけにするのか、これまでの延長線上の議論の繰り返しにするのか、私は大きな分岐点であると思っています。</p> <p>さらには、道内には同じように百年記念などの事業で設置された多くの顕彰像や記念碑などの維持、補修のあり方に関しても、その価値の評価だとか管理責任など多くの課題があります。また、作るときは良いのですが、それぞれの地域の気候条件に合わせた素材の選び方に関しても、きちっと考えて建立されたというか、建設された事例は残念ながら少ないというのが現状だと思います。</p> <p>私は、この150年を契機とした再生の議論が、これまでの結局、50年事業も、残すといったものを壊しちゃって、100年事業も残すと決めたものを、もし、コスト論だけで壊すんだったら、もう、今までの議論の上塗りになってしまうと思っています。私自身が危惧するところは、もし、道庁の皆さんの中で、どうしても維持にお金がかかるのだったら、解体しなければいけないと。例えば、文化の振興、色々皆さん担当が変わっちゃうけれども、この塔は、きちんと、それもあれですよ、ちゃんとした責任の所在を明らかにして、維持補修を怠ったのか、短期的な、何か、要因は何だったのかということきちっと道民の皆様にお詫びして、解体はするけど、例えば、年間6千万円維持補修かかるのを子どもたちのこれからの文化振興だとか、若いアーティストの人に、しっかり使うよと、もうハードじゃなくてそっちでいくんだ道庁は。というぐらいのことを、道庁の方が、子どもたちの目を見て、いえるんだしたら、私は、それはそれで、建物は解体だけ、ある意味で違う再生になると思うので、そこは必要だと思うのですが、残念ながら、向こう50年間に子どもたちの文化のためにお金をよこせるという担保が、きちんと使えるという担保がもしかするとなかなか難しいとすると、少なくとも、また繰り返しますけれども、これまでの50年、100年の記念事業の上塗りではあってはならないと思っています。</p> <p>最悪、そこも繰り返しているのですが、安全上に問題があるなら、議論をしている場合じゃないわけですよね。すぐ解体しなきゃいけないのです。これもお詫びして解体しなきゃいけないのですが、そこも何かこう、よく分からない。確かに、躯体は朽ちてはいるけれども、じゃその、何メーターの物質が、どれだけ飛散する危険があるのかということも分からない。そういう中で、私自身は、自分が提案した責任として、プロセスを重視をして、特に、次世代とか子どもたちを巻き込んだワークショップとかを提案した以上、その、道のしっかりとしたポジションというか、あれがはっきりしていないと、ガス抜きの合意形成のためのワークショップであってはならないと思っています。</p> <p>少なくとも、文化振興条例を所管し、今、縄文世界遺産、今日も、決議案、意見書案を採決いたしましたけれども、縄文世界遺産認定や民族共生象徴空間、29日にもいきますけれども、そういう議論を進めている環境生活部での3本柱のこの議論は1つだと思うので、道民議論に入る前提として、百年記念塔再生に向けての見解を明らかにしていただきたいと思っています。見解を伺います。</p>	<p>こととしております。</p> <p>道といたしましては、今後、ワークショップの開催や専門家等の意見聴取、大学への出前講座など、様々な取り組みを通じまして、道民の皆さんのご意見を十分伺い、記念塔を含む百年記念施設を核としたこのエリア全体が、担ってきた役割を踏まえるとともに、今後50年、100年という未来を展望し、多くの道民や国内外の方々にぎわう、また、文化や歴史、自然に直接ふれあえる空間となるよう再生構想の検討を進めてまいる考えでございます。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>最後に指摘ということで、今、部長の方から、今後50年、100年という未来を展望し、多くの道民や国内外の方々に賑わう空間となるよう、再生構想の検討を進めてまいる考えということで、百年記念塔単独ではなく、エリアとして考えるということですので、今、指定管理者制度のあり方ですとか、色々、道も、見直し、おそらく今、これから入るとは思いますけれども、国自体も、コンセッション方式ですとか、本当のいろんな道有施設のあり方、公共施設のあり方についての検討もされていることと思いますので、エリアとしてやるということが、なんとなく、逃げではないように、本当の意味で外部資本も含めて、どういう形をしていくのかというものも、更に幅広い有識者の方にも意見を聞いて、進めていただくよう、指摘を申し上げます、私も、また改めて議論を重ねさせていただきたいということを申し上げます、長くなって恐縮でしたけれども、質問を終わります。</p>	